慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オンライン教育と文化財のマテリアリティ
Sub Title	
Author	松田, 隆美(Matsuda, Takami)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.7, No.1 (2020. 3) ,p.58- 63
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 DMC研究センターシンポジウム第9回「大学教育のミライ： オープンエデュケーションのその先へ」これからのMOOCの話をしよう 開催日時 : 2019年11月20日 (水) 14:00〜19:00 開催場所 : 慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎2F大会議室 講演2 オンラインで世界に開く日本の文化財
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000007-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

講演２

オンラインで世界に開く日本の文化財

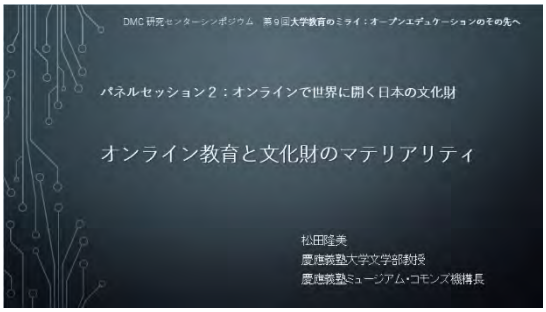
オンライン教育と文化財のマテリアリティ

松田 隆美

（慶應義塾ミュージアム・コモンズ機構長／

慶應義塾大学文学部教授）

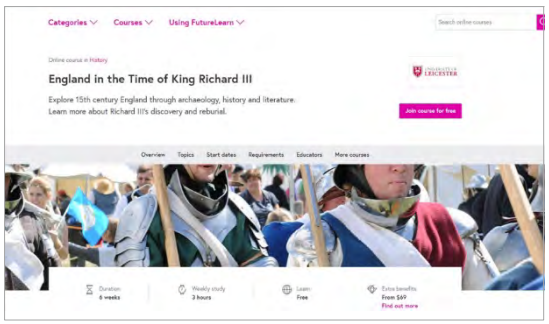
慶應義塾ミュージアム・コモンズの機構長を務めております、松田と申します。よろしくお願いいたします。これが何かというのはおいおい明らかになるかと思います。



私と MOOC の関わりは、慶應義塾で最初に MOOC というのをやってみようという話になりましたとき、プラットフォームをどこにするかを考えるにあたり、大学から呼ばれて、検討したところから始まりました。

そこで、FutureLearn をプラットフォームとして始めるということが決まりまして、それではまず最初にどういうコースを作るかを考える親委員会に、当時の DMC 所長として加わりました。そこでいくつか案を考えるにあたって、FutureLearn に参加している大学はどういうコースを開講しているのかを少し見てみました。すると、やはり地元ネタから始まっているのです。

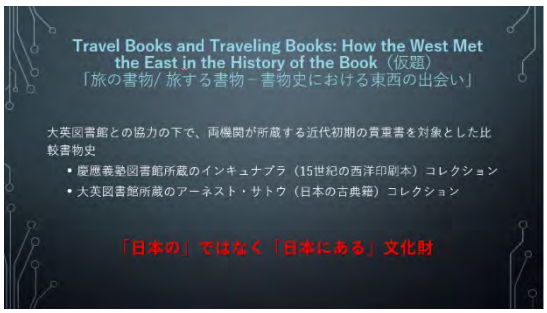
FutureLearn はイギリスで始まりましたので、イギリスの地方大学は、大半が参加しております。例えばニューカッスル大学は、近くにあるヘイドリアンズ・ウォールというローマ時代の遺跡の話でまずコースを作っています。それからレスター大学は、ちょうどその頃市内でリチャード三世のお墓が見つかりましたので、それでコースを作りました。やはりまず、自分たちが一番リソースのある近いところから、「うちの大学は、これが一つ、文化的な売りなんだよ」というところから、始めるものなのかと思いました。



その委員会で、慶應義塾では、図書館や斯道文庫の貴重書が充実しているので、そこからまず始めたという経緯がございます。斯道文庫の佐々木先生などのご尽力があり

まして、いくつかのコースが制作されました。

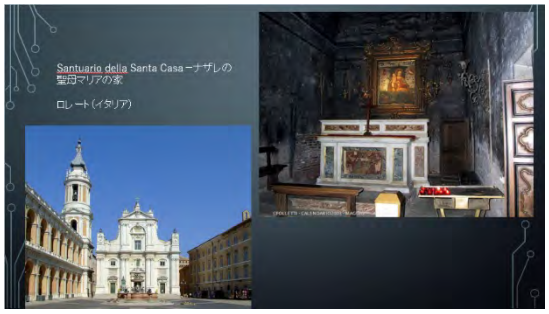
今、私が関わって作っているコースはやはり書物をテーマとしますが、日本の書物だけではなく、東西の書物を扱います。そして大英図書館との協力の下で、両機関が所蔵する貴重書を使ってコースを制作しています。慶應からは西洋の貴重書、図書館が所蔵している 15 世紀の刊本を提供します。そして大英図書館は、同館が持っているアーネスト・サトウ・コレクションという日本の古典籍のコレクションを使います。つまり、日本のものではなく、日本にある文化財を活用することになります。いわゆるクールジャパン的なことではないコースです。



こういうコースを制作しようと思った理由のひとつには、文化財は移動するという考えがあります。移動は文化財の宿命と考えております。こちらはニューヨークのメトロポリタン美術館の中世美術分館という建物ですが、実はスペインにあった中世の修道院の遺跡を、全部持ってきて、あらためて組み立てたものです。

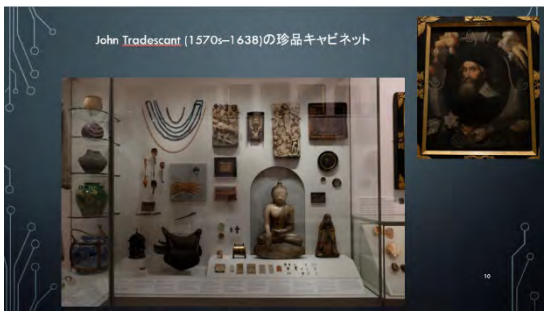
このように建築物でも移動するわけです。さらにこれは、イエス・キリストがピラトの館で上った階段と言い伝えられてきたものですが、なぜかローマのサン・ジョバンニ・ラテラノ教会にあるのです。

さらに同じイタリアのロレートという街には、聖母マリアの生家があります。もちろんこれは伝説ですから、100 パーセント信じていただく必要はないのですが、しかしこのように文化財は移動し、移動させられる、この点は文化財の宿命だろうと考えています。

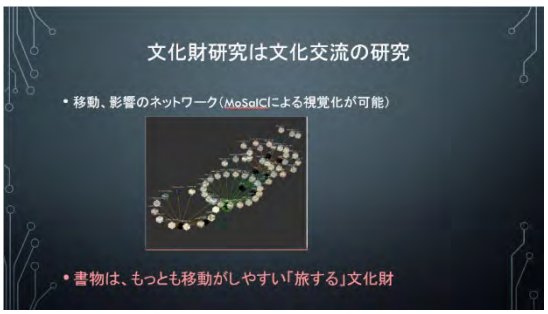


さらに文化財を収集するという行為、異文化を占有したり、異文化のものを収集する行為も、昔から見られることです。ミュージアムの起源は、珍品キャビネットと称されるものです。その最も古い例は、西洋最古のミュージアムとされる、オックスフォード大学付属のアシュモレアン博物館です。その起源はジョン・トラデスカントという少し変わった人物が蒐集した外国の骨董や珍品の類いで、それが整理されて博術館の起源となったとされています。

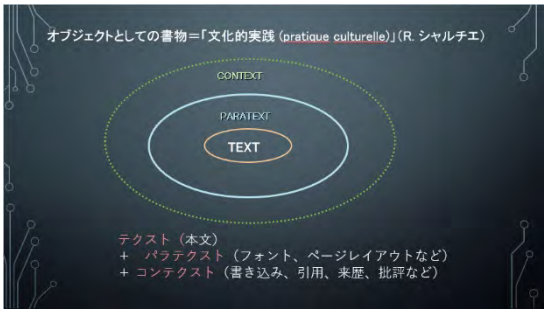
つまり、文化財を研究する、あるいは文化財と関わるということは、異文化交流の実際を研究するということなのです。



そうした文化財の移動のネットワークを、例えばDMCで開発したMoSaICなどのシステムを使って可視化すると、非常に立体的に見えて興味深いと思います。しかし、本日は、書物は、中でも最も移動がしやすい、ある意味、旅する文化財であるという視点にたって、書物をMOOCのコースで扱うことの意義について、私なりに少し考えてみたいと思います。



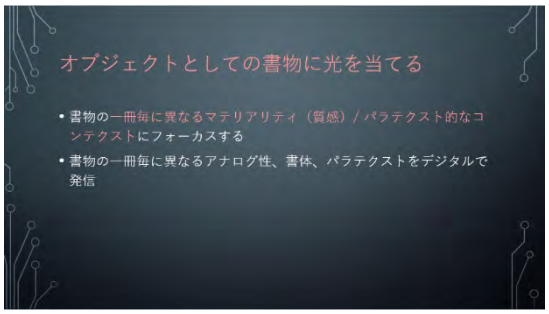
文化財としての書物には、何よりもまずひとつの「もの」という側面があります。さらに、書物は、3つのレイヤーから成っていると考えられます。まず本とは読まれるものですから、読まれる本文(text)が存在します。



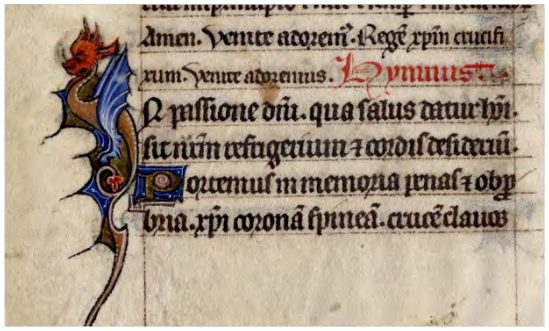
しかし、それが実際に読まれるためには、ひとつの「もの」としての形が必要であると、伝統的に見なされてきました。そこには、どういう活字を使っているか、どんなページレイアウトなのか、表紙のデザインはどうなっているのか、紙の質はどういうものなのかといった、「もの」としての書物の特徴

が存在します。これらはパラテクスト(paratext)と総称されて、具体的な情報としてテキストを包み込んでいるのです。さらに読者が余白に書き込みをしたり、あるいは別な箇所で引用したり、本についての批評を残したりすることで、その書物の評価や重要性は常に変化していて、それはひとつの文脈（context）として書物を取り囲んでいます。このテクスト・パラテクスト・コンテクストの３層から成っているのが、１冊の書物というものです。このそれぞれの層だけをデジタルに取り出して変換することは可能です。テクストだけを電子テクストにすることはできますし、高精細デジタルファクシミリのかたちで、テクストとパラテクストの層だけをある程度、伝えることもできます。それから、ウェブ上のオンライン・エディションのような構造で、日々変わっていくコンテクスト情報を、リアルタイムでテクストの周りに配置していく仕組みを作ることもできます。

しかし、ここでこの文化財として書物を考えるにあたって実現したいことは、オブジェクトとしての書物に光を当てるということなのです。書物は１冊ごとに全く異なるマテリアリティ、物質性を持っています。ですから、同時に印刷された書物でも、1 冊ごとに微妙な違いがあります。所有者や収蔵場所でも違ってくるし、印刷の途中でも微妙に差異が生じることがあります。

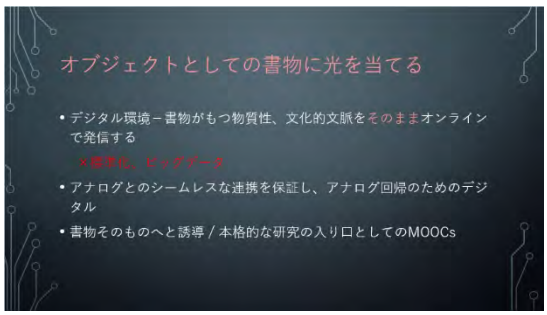


そういう１冊毎の書物が持っている個性に注目をすることを、書物のコースで実践することが重要だと思っています。1 冊毎に異なるアナログ性、書体やその他のパラテクストの違いを、MOOC という環境をつかって発信することです。例えば、これは 13 世紀に書かれた手書きの写本ですが、これを目にして、書体の特徴、色の違い、装飾の独創性などを、まず各自が言語化してみることです。



こちらは慶應義塾図書館所蔵の「グーテンベルク聖書」の 1 ページですが、紙が持っている質感や、挿絵の色の具合など、「もの」として見たときに浮かび上がってくる、書物のマテリアリティ、質感に光を当てることが MOOC で書物を対象とする意義ではないかと考えます。

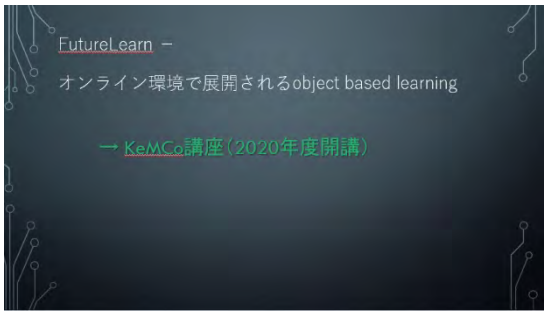
デジタル環境は、書物が持っている物質性や文化的文脈などを、逆説的ですが、その固有の質感を保ちつつオンラインで発信できる環境であると言えます。デジタル環境の長所は、情報を整理して標準化して提供するというよりも、むしろ「もの」がそれぞれに持っている個性を、そのままオンラインで提供できるというところにあります。アナログとのシームレスな連携を保証しつつ、デジタルを介することで最終的にもう一回、あらたな発想を検証するためにアナログに戻りたくなるような、そんな教育を、このオープンエデュケーションのプラットフォームで実現することが重要です。



学習者は、漠然と知っていた書物というものに対して、オンラインの MOOC でデジタル的にその物質性を検討することで、初めて明確な認識をもつことになるかもしれません。高精細デジタル画像を使いつつも、学習やディスカッションを通じて、書物固有の質感に触れている、そういうらせん状のループを描くオンラインコースの役割が考えられるのではないかと思います。それはある意味、大学という組織の中で考えれば、MOOC を一つの入り口として、より本格的な研究を、この MOOC を作ったキャンパスで始めたいというモチベーションにつながる、もう一つの教室での教育としての役割を果たせるかもしれません。

現在準備中の FutureLearn の書物研究コース（仮タイトル：Travel Books and Travelling Books: How the West met the East in the history of the book）で考えていることは、オンライン環境で展開されるオブジェクト・ベースドな教育の形です。FutureLearn では、Object Based Learning をオンラインで試みますが、2019 年度に発足した「慶應義塾ミュージアム・コモンズ」(KeMCo) という新しい組織では、それを KeMCo 講座という形で 2020 年度から始めます。2021 年春に開館予定の新展示施設内に

準備されるファブラボ的空間を活用して、文化財をオブジェクトとして見ていく教育を始めたいと思っています。5 年後を考えるならば、FutureLearn をプラットフォームとして実現する教育と、キャンパスでのオブジェクトベースの教育がうまく連携して、新しい教育の形が生まれるかもしれません。



「日本の」ではなく、「日本にある」文化財がそれぞれに持っている個性に光を当てて、ダイバーシティを大事にするような教育の形に発展してゆくことが重要でしょう。

KeMCo については、KeMCo 専任講師の本間さんが、さらに詳しくお話ししてくださると思います。私の話は以上とさせていただきます。ありがとうございました。